

大島幹雄著

「滿州浪漫」

—長谷川濬が見た夢—

2009年『木靴』(サホ)をはいて——函館散文詩集』という長谷川瀬(しゅん)の詩集が出た。表丁や造本にもこまやかで、神経の行き届いた美しい詩集だ。その詩集の出

版に奔走したのがこの評伝の著者だった。長谷川瀬が戦後に書き残していくと、およそ130冊のノートを遺族から託された著者が、その中から、「青鷗」と題されたノートを中心と題されたノートを中心

忘・谷譲二・牧逸馬の筆名を使って縦横無尽に小説を書きまくった長兄海太郎、次兄の画家溝二郎、そして弟の戦後派作家四郎とともに、長谷川四兄弟の一人、戦前の日本で

ともにドン「サック合唱団」の日本公演を成功させた後、神彰と別れ、文壇とも交わらず、シベリア航路の木材船ロシア語通訳として生活の糧を得て死んでいった長谷川瀧の生涯が初めて跡づけられ

き詩人逸見猶吉の遺体を  
焼き、幼い娘を引き揚げ  
の途上、病で失うという、  
その大陸での半生は、志  
をもって海を渡った若き  
文学者の激しい体験の連  
続だ。しかし、なぜか読  
む者の胸を打つのは、む

ろうじて戦前と戦後を、  
そしてみずからの方へ  
の夢を必死につなぎとめる  
長谷川濬を追う、共感  
に満ちた記述である。

シベリアのコサックと  
肩を組んで歌い、悠揚と  
歩むシベリア虎を幻視し



に残された作品と回想を入念に拾い上げ、弔いの鐘を鳴らすよう書かれた伝記だ。長谷川瀆の名前は、林不

シベリアの密林を夢みながら  
ベストセラーとなつた。た。  
しき引き揚げ後、定

しろ引き揚げ後、定職に

は、大きすぎる夢の器であつたのだ。

ベストセラーとなつた。ハルбинで老作家バイコフと出会い、作家として身を立てるために満蒙の奥地を単身探訪し、終戦直後、満映理事長だった甘粕正彦の最期を看取り、敗残の満洲の野で若少年時代から満映での活動、そして戦後、「赤い呼び屋」と称された神彰と評伝によつて、函館での『偉大なる王』を訳したロシア文学者として知られている。しかし、このベストセラーとなつた。

しろ引き揚げ後、定職につけぬ貧困の中で15歳の息子を死なせ、深い自責の念を負い続け、立て続けに仕事の挫折と失意のどん底で、遠くシベリアの密林を夢見ながら、ロシア語という一本の糸でか

藤原書店、12年9月、  
352頁、2800円十  
税